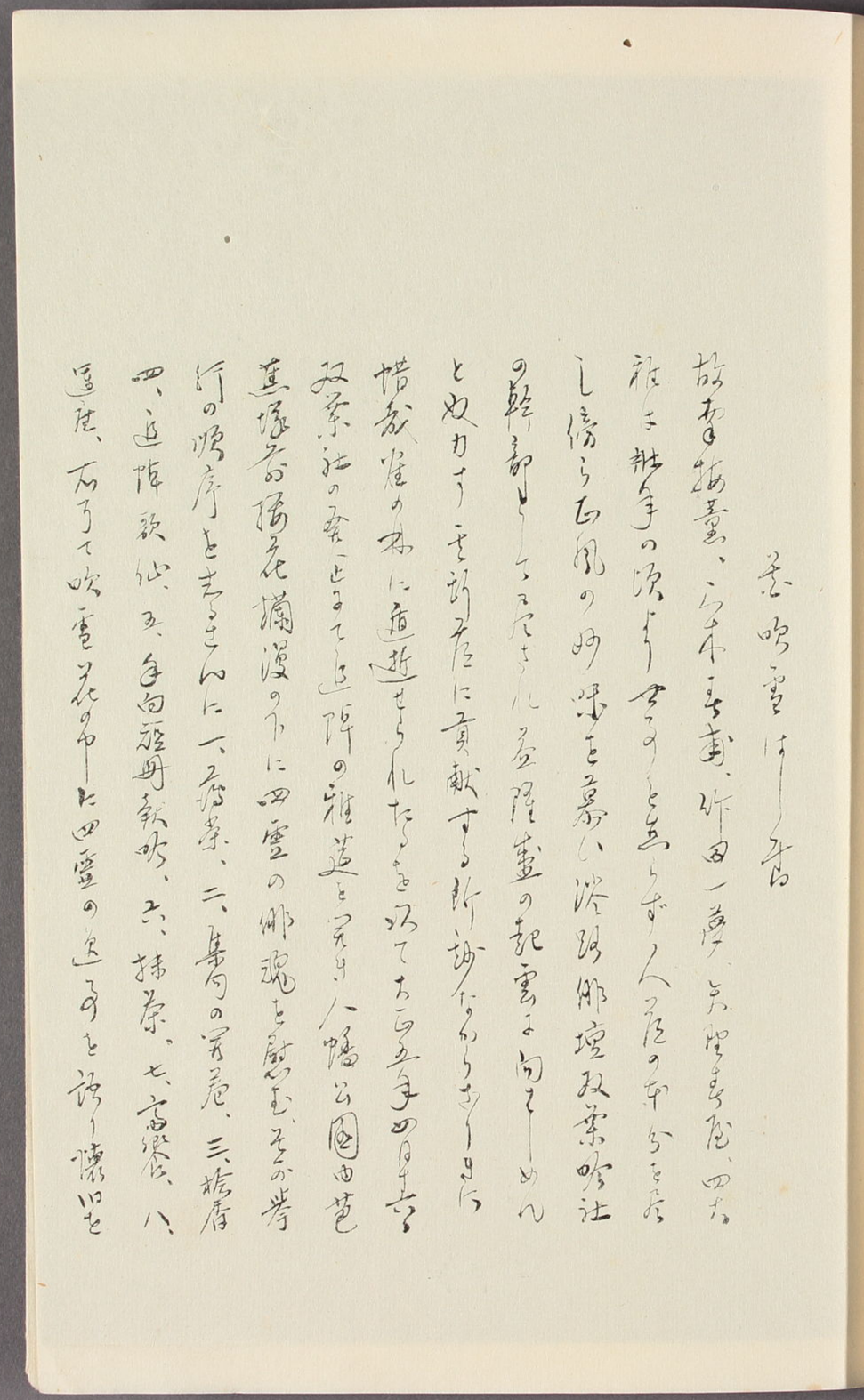
四佛五祥瑞

故南梅薰

故竹田一夢

故三木春甫

故矢野春屋



茶吟雪はけし者

故郷を物語、今不幸を哀、作田一夢氏望月氏、四方
社を社会事の頃より雪の人を思ふ人達の中分を表
し傍ら西風の吟味を慕い淡路郷壇政策吟社
の幹部として活躍され隆盛の起因を向上せ
と奴力す事幹部に貢献する所多なりしに
惜哉産の為に逝去せられたるを以て去る四月廿
政策社の委員として追悼の雅道と共に八幡公園西苞
蕉塚碑の碑文を撰し、その考
行の順序を考へられに一、春雨、二、春雨の実意、三、春雨
四、追悼歌仙、五、手向歌、六、抹茶、七、富貴、八、
逝去、右の吟雪花の中に四雪の逝去を詠う懐旧を

清一黄昏ふるさとをおもひざりき無に成自吟と往になさ
句を心ちに成た化で丁招とかーて来吟雪とあづ
叶浩の紀友にもと浩士の原意を浩せんたいかち
贈りたーとある事物図示不一二ある事の長句を吸
みてもー書をなしたるものは

二五　仙跡新三人　誠

俳諧紀行　迫悼新仙行

是丈を　仙長　中　茶道　梅花
露の中　ふ時しは友鶴　魯恨
矢の絵を商ふ　ゆふ事暮れ　菖宇
迫ふ　ー　迫　保ふ　ふ　歳　鮫月
浜中　程光の清　中　坂の月　如手
茹てもて来る義の案案　歳如
殊更上浦　ー　社を岩城の夫　作雨
仙程の句と絶えを利ふん　小童
歌詠て歌を知らすふ物の内　柳池
瘦　けせぬかと向ふ姿鏡　松西
武蔵を合けて暑さの身に婚へ　吉井

水平線へ影響する
提灯の光の色は何である　　壺天
呼吸ぬ小鳥耳を指さす　　山下
糟味噌が味がよいとて誉められ　　一夕
それからそれと活切りなし　　三赤
つる度抽り番迷る国なれや　　十雨
直に机る燈る陽　実　　抽国
雲る入る雪へ声を残し　　刀子
生命保険重理に勧める　　辞郎
情足に婚和とすし婦軍　　雪友
秋もの静に淡路ねこ丸　　光雪
俺ものらぎるは稀な下弦　　竹子

とくらし字はば根なし言　　松山
あとけなき心のうちぞ活らかふ　　味雨
音ほまして国は空穂　　蝶夢
謡う幸こちの国に帰して　　松女
まこうかうなるあれが遺言　　湖丹
切捨て情さまるなる月の声　　岱渓
律の調べに鈴合なうさ　　不白
流れたる秋の流を一掬い　　枝斜
迷う中の都もはかりしられど　　渓舟
老の年は鬼にも角も仮の家　　辞宝
猪と叩いて旅の記を綴ち　　蘭窓
天窓のう流ぴて蛙の雷　　法盛

釜底釣子て利茶武む　執筆

潢屋

梅薫籠老遠咲

春

唐蘇の香や神代めきたる事をうつ
夕風や梦の中なる山の宗
陽炎や首出す牛の鼻の先
丸窓に梅の影さす初はかな
行春やもりびん迄もはの中旅

夏

多摩川に流れて去りぬ芥子の花
芥子散るや上野の鐘の遠響き
月の江や真一文字や部屋
武者振は幟に見えて鶏鳴
明けて来る庭を離れぬ遠の花

秋

秋の蝶人なつかしう来りけり
一雨もり砧遠切れて庭の夕
秋の山蓋のむ鐘の響哉
何もかも捨てる浮世は月ゆ
松風の中に碁の遠音かな

冬

寒梅や庭に小雪の遠ぶ聲

松杉の抑合ふ中や星祭り
白波に人の山なす鯨の子
雪の毛の杉から散るや小春月
吹風に片寄る声や池の蛙

春浦 翁遺吟

春

霞山の流れも清きさくら哉
光る風柳斗りの堤うら哉
江に臺て柳うつして春の色
柳吹く風は別らと思ひけり
雁の羽に光る風あるる春雨哉

夏

夕 音を枕の下に居寝哉
涼しさや橋の隙の九尺橋
祇園会や水低ふ赤い人面
神の灯は物の情一市下闇
月花の旅仕盡して富士詣

秋

横へた人にうり仕た栗山の哉
いろ〳〵の霧や花野の新景色
魂棚や新仏と添へる虫の聲
もろ雷の捕虜を集めて角力哉
玉川を中に狭んで隣のな

柳散り富士の見へすゝ小雪哉
嫁入の日を延しとけり神迎
雪声の今日も川筋傾いけり
変らぬ柳のみきほゝ冬木立
住馴れた古所蓋けり雪の宿

一夢雅丈遺吟

春

今日もみ富士見る旅の風光る
去程出て明おもしろき柳哉

夏

咲ありと云ふは思ふと芥子の花
小柳の話も去たり不二詣

川狩や夜襲にかゝる身拵へ

秋

油断して牛に踏るゝ秋の蝶
一思案する中に芒の別れ哉

冬

柏手も出雲へ届け神の留主
字帽を冠つた柳市雪の柳

春風翁遺吟

春

鶯の引口和らぐ浦の春
あな思ふ親の洋行二日灸
逝者知らぬ山路去行ゆ二日灸

夏

稲千の人死深し一夏の月
月と声雲と姿あり時しる
紫陽花にうつろふ窓の幾夜

社

初汐や芦は隠れて四社の聲
よく学けば風もあらず住の声
飛び機に出ぬ崩れて雁の声

冬

心眠る禅寺の食可南
寒畑の山茶花咲きぬ神の留主
寒声の夜毎あかるや裏の山

諸家吟

香雪園梅薫翁と悼みて

咲てはらる薫りなりこの一株の梅　餓日
そむく思ふ梅の薫る窓　梅阿
山荘の窓を開して梅薫る　晨哉
喫やうて淋しうなるめざくら　梅科
歌句物して梅は散りにけり　静里
惜めども散は是非なし梅の花　一水
幾月日暮ても梅の花あり　梅地
梅も散れど薫り迄波まおりけり　松の尼
咲花の夢見て行や長の旅　窓井
吟子かなし世為の都へ長の旅　小達

散るまつと思へと惜しき桜かな　山口

山吹も散るや菖蒲の名も似す　哉女

女やあるす双葉社はこの事哉し　静雄

花の色を神も惜しと行く春　力芝

散るを猶名をさいえんる紅葉哉　三葉

春雨に行て戻らぬ人の音　松山

色のなる思ひそ神よ花の文　光雲

春雨に二葉の松の松てよう　竹叟

散りてなほ時のうるさきうら哉　十雨

散り果てし残る句や梅の花　治盛

天こうける魂はいのこの五月雨　松雄

散りぬれど薫りはうる梅の花　魯地

睡足軒春甫翁の霊に奉向けて

成果や葉は抜しも香の残る　抜尾

惜めども〳〵行春なれや　仝

紅糸にて植糸のしの出立哉　春尾

迎まする春や見向もせぬ扇哉　鈴月

抜しとも人はうらすす抜尾花　如雄

七歳の夢や墨古り神の雨　宝井

霊あらば叱りあまわれ牡丹の葉　静雄

散る牡丹ちらぬ牡丹の雫かな　仝

蒲公英や仏有り葉に塚の荷　松の尾

ちんこねと物言ひそうも抜尾花　一雄

文りの友に時雨も聞夜うな　春以

散りたるとて手をはたちし花の見
るまもなく枝さすものうらやましく
花やこのに散りしを紅葉を惜むなる
咲けども散る限あるはを花に雨　園子
春あるに枝や果て咲け自分　小壺
行春を留めもいかにつれに関　梅地
去き君の名ゆゑ語ゆゑ花の下　一水
今かし早き福沼の橋ひなる　静里
花咲てさきて散りし本の恵し　雨岳
きみまさで譯ふめはるにぬる袖　宮井
明程ふ来て散らけり枝に花　枝軒
何もも夢の浮世や散り残　雲濤
　　　　　　　　　　　　　鄉月
　　　　　　　　　　　　　魯柏

咲平岳一散りし梅は春ぞある　魯北
俳の春に残る雨　春の雨　仝

○

見ることに袖は濡れにけり　白雪
君の残せし軍のさきしを
花のあた月のゆふぐを今よは　芝去
誰と語らん君しまきねば
矢の家一夢雅丈の霊に手向けて
夢と散る花やなきなる風の跡　鄉月
春の紀や見てもも夢のさまを　梅屋
ありし代は春の夢　松の屋
憧塞や見てもも庭の春　梅　風岳

雲ぞと一茶原咲き志の散り　　そど　　横斜

花の香や一散りてのち忘られず　　客丹

雲き友を花と見し夜や夢の跡　　辞星

散失てゐたも夢かや山桜　　一水

偶まゝ人情の橋咲くら毎に　　梅旭

散る花に夢も短かき落花哉　　書鴉

矢野麦屋翁の畫に手向けて

清るのもまかなし今朝の高仏雲　　鈍丹

行春や浦の苫屋も留まらぬ　　梅屋

影庵まで見送る人や雁　　松の屋

暮の春手ぐて湖や春の雨　　如年

あもこずを何まへ翁の雲ゝ　　庵去

雁明日にぬくもり下草小象哉　　光雪

幾春も枝に止めぬ――玉　　梅旭

惜しめども甲斐なき春の方向哉　　武女

屋根越にて――は橋の方向哉　　一水

極楽の鳥となる花の藤棚哉　　寒丹

いさぎ桜散るは橋の風情哉　　辞星

咲けも散る限りある日を花に雨　　梅旭

入れの鐘の響やかすか　　虎国

去年君の雲雀の句のみと興ずるを

雲雀の句語る人なしまの雨　　横斜

亡き君に手向ける白心や菊の下　　鳥鴉

暮て行く春の名残や枝の友　　蔡庵

追悼吉屋信子俳句鑑賞

花月園　静雅先生選

一刻を惜しみ新宿の月と梅　心月
慰みに雲を飼ひ盆の上　不白
三夫婦の腰掛梅の式や春の風　全
吉屋や今の世も暮を嫌てなし　山月
世かまれて一息をかく冬毬哉　雅園
吉屋や茶点施す謡曲　不白
一部の人皆老い如仏を念　静里
梅茶屋の錆筍まし和梅　房園
花に来て齢の外の一日哉　梅庵
行春を蛙程呼ぶものはなし　山月

裏若き君の姿や春の雲　横斜
蝶舞ふや菊に寝たるの夢の上　梅旭
行春を寺に鐘つき暮のなし　房園
春の梅見ゆる所に薫りけり　梅旭
ちなみに風山一つ二つ哉　汲吟
学に寝た小半の夢や梅雲雀　静里
陽炎の燃えて屋根ふく冬哉　全
老の身の指図や梅の高砂　壺天
沉草の星の小唄や春の月　横斜
暁や梅の香の残る背戸の石　山月
梅に向ひ柳に寄しまの風　静里
夕の寝る木の百ふ立しまの月　松山

五　春

陽炎や小利根出すすゝき哉　麦国
春の宵志ゝみの鉢唐戟　挑科
白魚や京の雪駄の茶壺縁　不白
仁和寺の法師果けり春の月　桃科
大佛の柱くゞるや春の風　山口
人　信
法の海る紅き人や暮の春　不白
地　信
鎗持の毛脛を照るや春の風　汲吟
天　信
菜の花や一強つゝて法隆寺　不白

追　春

山の根る沈む小村の餘寒哉　静雅
志賀園梅花会師遊
春の夜や覚ても惜き花の夢　山口
暮ゝ程春の夜遠き梅花哉　李国
鶯ふ春眠しゝ山の家　不白
乗ふみは春の梅に残の月　梅国
花も最う咲たに寒き春なれ　鄙月
春雨に濡仏も見た花の影　桃旭
明る雁深遠も春も和鮮し　桃旭
俳係昭の歳出す春の景色哉　士
春と云ふ味もこゝらか初鶯　静雅

清らぬ書の色香や梅雨若　杏園
出まぶれて雨のあり所の梅薫る　稚園
偶まに昔を今や薫る　梅　梅旭
梅ゝ香の庭一面に薫りけり　梅園

五　客

陽炎や小判堀出す古屋敷　虎園
梅まちり称は伸てゆるむ水　鄧丹
雪の梅見ゆる牛りに薫りけり　梅旭
縦横や何はなくとも身と梅　壺天
良渦玉水にも花の薫らん　鄧丹

人　住

梅ゝも梅まもあるも花曇　松山

地　住

黄金の初音ゆらはや窓の梅　松心

天　住

言の葉に薫り時して教きゝら　鄧丹

迚　章

ちる迚も残る薫りや園の梅　梅屋

藝庵鄧丹宗匠選

一段来て見た二見の初日の出　梅屋
梅一輪咲くや心の金更　壺天
花達て是代こそ一春の月　吸吟
一段ます来て来へて来る春　梅屋
春の日や今年の達磨の北に成る　山丹

夢に柏を一つ拾ひけり　松山

新涼や汀に一人渚に一人　梅花

子松為又世てけり寺の海　静里

黄昏や今日の日記の書初め　不白

茶に醉て酒に醉ふや寺の雨　壺天

一節の糸この命ぞ弾　松の花

雄図の笠に吹けり寺の風　静里

梅咲くや赤く流るる崖の雲　梅旭

一船は花見弁当の源一哉　松の花

大佛の柱くくるや寺の風　山月

一雁い蝶も聖山に寺の夢　梅旭

数入や一際目立つ都鳥俗　松の花

鞦韆の徒然草や寺の宵　拔斜

蝶舞ふや箔に寂さの夢の上　梅旭

花の浦波暮に近まるや寺の雨　静里

此庵の主なりけり梅一本　松の花

一つ井に子屋二軒や梅の花　不白

五　家

聖道や妹らの蕨菜の一本哉　松の家

寺や茶畑や春雨の都のな　梅花

寺雨や机に結ふ花の夢　松山

徒保姫の歳出す寺の景色哉　梅旭

一坂を皆一寺や寺巡り　李国

人　住

赤雪の花ふ聖堂の撥の音　　静里

地　　佐

満山の春雄き梅かな　　静雄

天　　佐

遥悼の一句接ぎて春寒し　　魯北

天佐の玉吟成建句と一緒に表六句を連ね遥かよりの

遥悼の一句接ぎて春寒し　　魯北

また解りの低かい清聲　　鍬月

やゝ温む夕鍋屋に泥らして　　仝

茶器自前の味も格別　　仝

すつと出た月よ一座の数りに　　仝

霧に重たき聖堂の余花　　仝

仙路行書此京匠遥

婚心の春雄き　梅かな　　静雄

鍬園の里に吹きけり春の風　　仝

春雨や機の為る至所や　梅の花　　種園

一口つゝ日御の伸ぶ厳かな　　心月

春雨や机に鉄ぶ恋の夢　　松山

降る時は積る春の雪　　心月

一度徒て見た二兄の初日の出　　梅屋

亡友に一枝手向け　市梅　　梅屋

春なれやいつ帰るも知れぬ旅　　心月

迷も散る様一重に赤くはなし　　仝

仁和寺の法話果ける春の月　　桜解

西行を夢よ語るまぐや姫に寄せて

限りありと思へとまるの動かぬ哉　按斜

色に染て散るの一日哉　梅尼

一行も雲に消入る山一度哉　松の尼

梅に向し柳ゆるし春の風　鶴堂

人　佐

行春を鶯ほとゝぎすのはなし　心月

地　佐

春と云ふ味もまぢらふ初鰹　鶴雄

天

柳にも梅もあるゆゑ春雲　松山

巡　章

五　宮

函折つゝ蝶は放ぬ花一枝　松山

春雨や今の世暮の鐘でなし　心月

花の坊法華経を空まるや　鶴堂

京ひろ舞なるのゝや春の川　鶴雄

春の夜や覚めて惜しき春の夢　山月

梅一輪咲くや鶯の金屋　壺天

うぐひす麻の徒然なるや春の月　横斜

夢にさへ見てよもぎ生を重ぬ　鼠岳

春雨よ濡てもぬれた花の影　梅尼

昨日見し盛りは夢ぞ春の風　鈍月

歌反古の煙とゝなる夜や宵の春　横斜

雪のあと赤らしもの咲くはつけ　魯北